

令和三年度

中学校入学試験問題

国語

第二回（三月二日）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきなさい。

一、問題は28ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。

二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。

三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。

四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章を読んで、後の1～15の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがあります。※のついた説明は出題者が加えたものです。）

大隈^{おおくま}くんと揉^もめたのは三年生らしい。大隈くんの担任^{ひがしだ}の東田先生から、その三年生の担任である津島^{つしま}先生に事情が伝わったのかもしれない。それで揉め事の種らしい図書室ノートを見にきたというわけだ。

だったら放っておくわけにもいかない。詩織^{しおり}もすぐに司書室を出た。——津島先生は、立ったままノートのページを開いている。「どうやら、このあたりですね」

彼は十二月の書き込み^こを指差した。何の話か説明する気もなさそうだ。——事情を察することができたのは、詩織も昼休みが終わつてすぐに確認^①しておいたからだだった。

元は他愛のないラーメン談義だった。自分は豚骨^{とんこつ}ラーメンが好きだとか、いや魚介系^{ぎょかいけい}の方がいいとか、通は塩ラーメンで店の実力を見抜^{みぬ}くとか、何人かの男子がわいわいやっていた。そのうちに見覚えのある大隈くんの字で、『俺^{おれ}は白河^{しろかわ}ラーメン。あつさり醤油系^{しょうゆけい}で最高！』などと書き込んであった。

それを読んだ誰^{だれ}かが、東京ラーメンや喜多方^{きたかた}ラーメンとの違いを質問して、大隈くんは白河ラーメンの特徴^{とくちょう}を説明していた。トラブルの気配^{きはい}が漂^{ただよ}い始めたのはその直後だ。

『白河ラーメンって、チャーシューを食紅で赤くすんだろ？ 体に悪いんじゃない？』
② 誰かが、そんな指摘^{ししてき}を入れていた。大隈くんの書き込みに矢印を向けて書いてある。

大隈くんはそんなツッコミに対してさらに矢印を向けて反論した。

『それ、ただのデマ。食紅なんて使ってないし、だから体にも悪くない』

そこからは、互いに矢印を向けて書き合う議論になっていった。——詩織から見ると

A

な雰囲気さえあるやりとりだが、

⁽¹⁾トウジシヤたちは大真面目⁽²⁾だったらしい。

『デマじゃねえよ、ちゃんとウイキペディアに書いてあった』

『ウイキだから正しい、とは限らない』

『じゃあお前、まともな B があんのか』

B というのは、ニュース B とか情報源とかいう意味合いらしい。詩織は調味料の B を連想してしまったが、醤油ラー

メンのチャーシューに B は似合わないぞうだ。

『実際に白河でチャーシューメン食べて、ラーメン屋の店主の人から聞いた。ウイキよりよっぽど確実な B 』

『そんなの、その店が使ってないだけだろ』

『そのおっちゃん、元はサラリーマンでラーメン食べ歩きにはまって、脱サラして弟子入りして暖簾^{のれん}分^でけでラーメン屋を開いた人。白河ラーメンだけで何十軒^{けん}も回って何百杯^{ばい}も食べたけど、食紅で赤くしたチャーシューなんて一度も見たことないって。彼^{かれ}曰^いく、食紅と

か言^うってるのは「嘘^{うそ}を鵜^う呑^のみにして知^しったかぶったバカ」だって』

ラーメンがらみの話題はそこまでだった。——おそらくそれが昨年末のことで、大隈くんはその書き込みで議論をしめくくったつもりだったのだろう。それが年明けになって揉め事に発展したというわけだ。

上級生に対して言葉づかいが生意気と受け取られたのかもしれないが、互いに名乗り合つての議論じゃないのだから仕方ない。なにも教室にまで乗り込んで締め上げなくたってよかろうにという話ではあった。

まあそれでも、東田先生が割って入ってその場を収めたのなら心配することもない。詩織が口出しすることでもないかと思っていたが——ノートを確認した津島先生は、少々意地悪な笑みを浮かべた。^③

「何のこたあない、どっちも間違ってるな」

「えっ?」

「ここで言い合いしてる両方——片方はうちのクラスの坂田友伸らしいですが、もう一方だって威張れたもんじゃないです」

「書いてることが、間違ってるんですか?」

「書いてることというか……考え方ですね。二人まとめて指導してやりたいとこだ」

「指導、ですか……」

詩織は首を傾げてみせたが、津島先生は意に介さない。^④ノートを棚に戻して帰り仕度を始めた。

「まあ何にせよ、東田先生が割って入ってくれてよかった。坂田は就職決まってますからね。下手に下級生でも殴って怪我でもさせて、内定取り消しなんてなったら大変だ」

「そこまでの騒ぎじゃなさそうですが……」

「でもまあ、坂田から仕掛けたわけだし、あいつには当面、図書室の立ち入りも、このノートを見るのも禁止って言っときますよ」
クラス担任としてそういう処分を下して終了、という結論らしい。^⑤しかし詩織としては抵抗を覚えた。

「でも、図書館は全ての利用者に開かれている、というのが原則なんです。相手の大隈くんは図書委員ですし——」

「まあ二年の子は東田さんに任せます。でも坂田は、一度の注意で懲りずにまた揉めたら停学だの謹慎だのってことになりかねないし、原因から遠ざけちゃうのが一番ですよ」

「でも、図書室やノートが原因っていうのはちょっと違うと——」

「こういうのはネットの喧嘩けんかと一緒にいっしょですからね。書き込みが気になって見なくなる、見ると書きたくなる、言い合いから感情的になる、ってことなら、一方だけでも禁止するのが一番です。なにしろ坂田の就職先、外食チェーンですから。客商売には暴力傾向けいこうなんてまずいから——じゃ、お邪魔じゃましましたー」

詩織の反論は聞こえなかったのだろうか。津島先生は独り言みたいに言いながら図書室を出ていった。つくづくマイペースな人物で、これじゃ生徒も大変だろうなあと考えた。

(中略)

昼休み(※翌日の昼休み)、大隈くんが図書室に現れた。詩織がカウンターから「よかった。元気そうね」と声をかけると、心外⑥そうに言い返した。

「昨日の話なら、俺は別に何もなかったし」

「ならいいけど、心配してたんだよ。噂うわさがいろいろ聞こえてきて——図書室ノートがきつかけなら、何か対策した方がいいかって」「必要ないです」きっぱり告げられた。「下手にノート廃止はいしとか書き込み禁止とかされたら、俺が恨まれちゃうよ」

そう言⑦って雑誌コーナーの方に行っただと思っただけ、すぐに図書室を出ていった。他に用事もなさそうだったところを見ると、昨日の一件について彼なりの言い分を告げに来たということかもしれない。

結局、本人から細かい話は聞けなかったが、噂は入ってきた。大木くんやら智美ちゃんやら小枝嬢こえだじょうやら、二年生の常連たちが口々に続報を伝えてくれたのだ。

「オークマが脅おどされても動じなかったのは、勝てる相手と思ったからだって」

「殴ってくるほどはキレてないし、殴られたって平氣そうだって見定めたらしいです」

「一応、上級生みたいだから敬語で答えたし、だから自分は悪くないってことみたい」

「『舐めたこと言ってるじゃねえぞ』って凄まじくても『舐めてません』、『知ったかぶったバカって書いただろうが』『それはラーメン屋さんの言葉の引用です』って返してたって」

「でもオークマのそういう態度って、怒ってる相手からしたら火に油なんだろうね」^⑧

「オークマくん、空氣読めないからなー……」

「たとえ読めてたって、本氣でどうでもいいって思ってるんだよ。あいつの場合、そういうところがイラっとくるんだと思う」^⑨

こうなってくると、揉め事の続報というより大隈くんの人物評である。そろそろ注意しておいた方がよさそうだ。

しかし実行する前に、雑誌コーナーから声が上がった。

「ありやー……」

「これはやばいですねー」

何かと思って目をやると、三年生のベースくんと一年生の新田瞳ちゃんのカップルだった。雑誌コーナーの丸テーブルで二人して図書室ノートを開いている。

詩織はそちらに移動することにした。二人にそっと近づいて、わざと囁き声で告げた。

「二人とも、声は控えめにねー」

私語は絶対禁止という図書室ではないけれど、お喋りしているうちに声が高まることは多い。時々^⑩はたしなめることにしていた。

ところが、無言で一礼したベースくんからノートを見せられると、^⑪詩織の方が声を高めてしまった。

「あらー、これを書いてったのかー」

さつき大隈くんは、出て行く前に雑誌コーナーに立ち寄った。それはこの書き込みのためだったらしい。

『先輩せんぱいや先生から指導しどされましたので、自分がノートに何を書いたのか、確認しました。

やっぱり俺、間違まちがったことは書いてない！

以上。

二年A組 大隈広里おおくまひろさと『

それを見ている詩織に、瞳ちゃんとベースくんは小声で告げてきた。

「——ね？ やばそうでしょ？」

「坂田がこれ見たら、またひと悶着もんちゃくあるんじゃないかなあ？」

そこに大木くんや小枝嬢もやってきた。

(竹内真たけうちまこと『図書室のバシラドール』による)

問1 ―線①「確認しておいた」とあるが、何を「確認しておいた」のか。それを説明した次の文の【 】に当てはまる表現を十
字以上十五字以内で答えなさい。

・ 【 】 いきさつを確認しておいた。

問2 ―線②「誰かが、そんな指摘を入れていた」とあるが、「誰か」とは具体的に誰のことか。その氏名を文章中からぬき出して
答えなさい。

問3 A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ アウエー ロ コミカル ハ シリアス ニ マイルド

問4 六か所ある B に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ スパイス ロ ソース ハ ソルト ニ ペッパー

問5 — 線③「少々意地悪な笑みを浮かべた」とあるが、「笑みを浮かべた」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 困っている詩織に対し、余裕があるところを見せたいと思ったから。

ロ 東田先生の誤りを皆の前で指摘することができ、誇らしく思ったから。

ハ 不確かな根拠に基づいて熱く議論している二人に、未熟さを感じたから。

ニ 若者らしく議論を戦わせている二人に、頼もしさとあやうさを感じたから。

問6 — 線④「意に介さない」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 気がおけない

ロ 気がつかない

ハ 気にくわない

ニ 気にしない

問7 ―線⑤「詩織としては抵抗を覚えた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 原因である図書室とノートから坂田くんを遠ざければ、揉め事はとりあえず解決するという津島先生の考えに納得できなかつたから。

ロ 坂田くんの就職に関することばかりを優先して、揉め事の原因が図書室にあると決めつける津島先生に対して納得できなかつたから。

ハ 自分が担任しているクラスの生徒のことまでも人任せにして、適当に問題を解決しようとしている津島先生の態度に納得できなかったから。

ニ 図書室ノートがきっかけの揉め事が原因で一人の生徒の人生が台無しになるという津島先生の考えは、大げさすぎて納得できなかったから。

問8 — 線⑥「心外そうに言い返した」とあるが、「心外そうに」とはどのような様子か。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 昨日の一件で自分が嫌な思いをしたことを、詩織をふくめ誰にも知られたくないという様子。
- ロ 昨日の一件の原因を作った一人である詩織からは、あれこれ口出しされたくないという様子。
- ハ 昨日の一件を心から後悔こうかいしているので、今となつてはこれ以上思い出したくないという様子。
- ニ 昨日の一件を自分は大事ととらえていないし、まわりにも騒ぎ立てられたくないという様子。

問9 — 線⑦「雑誌コーナーの方に行った」とあるが、「大隈くん」は何のために「行った」のか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ノートに挑発的なことを書いて、先輩に喧嘩を売るため。
- ロ 自分への書き込みが、ノートにあるかどうか調べるため。
- ハ 自分が以前、何をノートに書いたのかを確認するため。
- ニ 雑誌を読むふりをして、詩織との会話を打ち切るため。

問10 ―線⑧「火に油」は慣用句の一部である。次の【 】に漢字をふくむ二字の言葉を入れて、その慣用句を完成させなさい。

・火に油を【 】

問11 ―線⑨「そういうところ」とあるが、具体的にはどういうところか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 場の雰囲気を感じ周囲に合わせる、という行動を取らないところ。

ロ 人から言われたことを聞こうとせず、自分勝手に行動するところ。

ハ いつも自分中心にふるまい、自分は悪くないという態度をとるところ。

ニ 何を言われても動じることがなく、だれに対してもえらそうなところ。

問12 ―線⑩「たしなめる」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 見逃す
ロ 注意する
ハ 非難する
ニ 叱りとばす

問13 — 線⑪「詩織の方が声を高めてしまった」のは何に驚いたからか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 大隈くんは坂田くんが出入り禁止になったことを知っているのに、自分の意見をぶつけようとしていたから。
- ロ 大隈くんは詩織の図書室ノートを廃止するという提案に反対したのに、廃止を招きそうな内容を書いたから。
- ハ 大隈くんが先輩や先生からの指導を全く受け入れようとせず、自分の利益ばかりを考えて行動していたから。
- ニ 大隈くんが図書室ノートに書き残していた内容が、トラブルをさらに引き起こしかねないものだったから。

問14 — 線⑫「間違ったことは書いてない！」とあるが、「大隈くん」は何を主張しているのか。「大隈くん」の主張として適当でないものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ウィキペディアに書かれた内容ほど、情報源として確実なものはないということ。
- ロ 自分がノートに書いたことは、現地で実際に見聞きした正しい情報だということ。
- ハ 白河ラーメンのチャーシューは、食紅で赤く色づけをしているわけではないということ。
- ニ 先輩のことをけなしたのではなく、ラーメン屋の主人の言葉をかりただけだということ。

問15 — 線⑬(1)「トウジシャ」、(2)「大真面目」のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

二

次の文章を読んで、後の1～14の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがあります。）

ラグビーにもオリンピックにも、まったく【一】も湧かないし【一】も躍らないスポーツ音痴のわたくしですが、一度だけ、野球場で野球を観戦したことがございます。投げる人が投げた球を、棒を持った人がひっぱたいてなるべく遠くに飛ばし、それが誰の所属にも帰さないうちにひっぱたいた人が場内を一周できれば、ひっぱたいた側に点が入る、という程度の知識しかないのですけれども、それでもじゅうぶん楽しめました。夕暮れどきの群青色の空、見上げればその空は思いのほか広く、下のほうでは豆粒みたいな選手たちが超人的な身体能力を発揮して跳んだり走ったりしている。そんな天地の情景をながめながら飲むビールは、たいへんけっこうでありました。そして、もう一つけっこうだったのが、応援合戦であります。

あれ、たのしいですね。広いすり鉢状の客席にみっちり詰まった大観衆から地響きのごとく湧き上がる歓声は、鳥肌が立つようなすごみがありました。1、試合なんかろくに見ないで応援に専念しているらしき献身的な人（団長さん？）がいて、その人の号令一下、人々は立ったり座ったり、うちわを振ったり、歌ったり、じつに統制の取れた応援が繰り広げられている。あの応援シーンを見るためだけにでも、球場に足を運ぶ価値はあるな、と思いました。

ところが、少し前、その応援について少々残念なニュースが流れてきました。某球団の監督さんが、応援歌の中で選手を「お前」と呼ぶのは、いささか礼を失するのではないか、やめてほしい、と苦言を呈したそう。ために、応援団はその歌を使うのを自粛し、そんなこんなで応援風景がなんとなく元氣のないものになってしまった、という話でした。

いつとき話題になりましたから、覚えておいでの方もいらつしやいましょう。話題になる中で、「敬意逋減の法則」などという、日ごろ聞きなれない専門用語も飛び出しました。「逋減」とは、少しずつ減ること、です。2 「敬意逋減」とは、長年のうちに、当初

そのことばに込められていた敬意が少しずつすり減ることをいいます。

3、こういうときにままあることですが、さつそく早とちりする人が現れました。「ああ、やっぱりね。日本人はだんだん丁寧な話し方をしなくなるんだね。日本語、どうなっちゃうのかね」と嘆くような言説がネットに流れました。

いえいえ、違います。逆です。敬語が廃れるんじゃないくて、敬意がすり減るのです。つまりそれまで使ってきた敬語ではじゅうぶんに敬意を表せないような気がしてきて、もつと敬意を盛り込んだ表現が必要だと感じるようになるのです。応援歌の例でいえば、「お前」という単語にもともと込められていた敬意がすり減って、^③相手を「お前」と呼ぶことがむしろ失礼に響くようになってしまふ、そういう現象です。その結果、敬語は減るところか、むしろ往々にしてくどく、しつこく、なっぺいきます。

4、プレゼントなどの所有権を移転するときの動詞、「あげる」を例にとりましょう。もともとは文字通り「上げる」、つまり下から上、下位者から上位者に向けて、何かを進呈する行為でした。でもやがて上下関係のない間柄、たとえば相手が友だちや自分の家族であつても「あげる」を使うようになり、今では、（完全に下位者であつたはずの）ペットや植木鉢のゼラニウムにエサや水を与えるときにも、「a」ではなく、「あげる」を使う人のほうが多数派になっています。また、そういう人たちは、「エサ」や「水」などという単語もそのまま使うことはしません。かわいいゼラニウムには「お水」をあげなくちゃ、と言っていそうだし、愛しのポチには、そろそろ「お食事」をあげる時間ね、と言っていそうです。「さしあげる」と言い出す時代も、すぐそこかもしれません。あいや、猫ブログなどを見ると、猫さまのお世話にいそしむ人々は、すでに日常的に「お食事」を「さしあげる」と使っています。

さて、「お前」に話を戻します。「お前」は「御前」です。本来は上位の人を敬って呼ぶ語でした。それが、長く使われているうちにそこに込められていた敬意がすり減ってしまい、やがては対等の者に使われるようになり、ついで目下の者や子ども、しまいには犬猫を呼ぶ際に使われるようになり果てたのです。ですから、監督さんがたいせつな自軍の選手たちを、いくら応援のためとはいえ、犬猫

を呼ぶように「お前」呼ばわりされるのはいやだ、と思った気持ちも理解できます。

(中略)

④ 敬意通減の法則は、料理番組にも見られます。作る気も能力もなくせに、しばしば料理番組を鑑賞するのでありますが、見ていても気になるのが、「いただく」の使われ方です。番組のホストや料理人がゲストに向かって、「どうぞいただいてみてください」のように言うんですね。それも、けっこう頻繁に。

どうやら「食べる」の丁寧語として使っているつもりらしい。しかし、「いただく」は謙譲語です。あくまでも話し手側が自分や自分の身内の行為を低めていう謙譲語です。食べようとする客の側が、供されたものについて「これ、いただいてみていいですか」とか「じゃ、いただきます」というように使うべき動詞です。もてなす側の立場で、お客さんの行為に使う動詞ではありません。

たとえばパーティの主催者が言うとして、「本日は食べ放題でございます。みなさま、どうぞご自由に」のあとに入れられるのは次のどれでしょうか。

A お召し上がりください。

B いただいてください。

C ご賞味ください。

D 召し上がってください。

A、C、Dはどれも問題ありませんが、Bは規範的な使い方とはいえません。発話者本人も【 b 】側の人であるかのように

聞こえてしまいます。

「規範的な使い方とはいえませんが、^⑤奥歯に何かはさまったような言い方をしましたが、ほんとうなら、「間違いです！」と断言したい。実際、これがマナー教室とか国語のクイズとかだったら、断言していいと思います。しかし、現実の日本語使用場面では、この「誤用」がかなりの勢いで広がりつつあるのを感じるのはです。早晩、誤用とは言い切れなくなる日が来そうな予感がします。

もともと「いただく」に^{かく}含まれていた敬意、この場合は「 c 」ことによって相対的に相手を持ち上げることになるわけですが、そうした敬意がすり減ってきたのでしょうか。単に「食べる」のちよつと丁寧な言い方である、という^{にんしき}認識が広まりつつある気がします。

先日は、都内のレストランの店頭の案内に、「通常一万二千円のディナーコースが〇月〇日まで九千八百円でいただけます」と書かれているのを見かけました。旅先でフンパツして入ったホテル内の和食店では、上品な着物姿の^{なか}仲居さんから「まずは塩だけでいただいでみてください」と、てんぷらをすすめられました。さらに、ある友人は、ちよいとおしゃれなお店で、前菜を運んできた店員さんにこう言われたそうです。

「こちら大根餅^{もち}と有頭海老^{えび}の××です。海老は頭までいただけます」

ううむ。

「いただく」は、もともと何かを頭上に置くことです。「雪をいただいた富士山」というのがそれです。うわ、白髪^{しろが}が出てきちゃったよ、というときも、「私も頭に【 d 】をいただく年齢^{ねんれい}になりましたね」と余裕^{よゆう}をかますのに使えます。ついでにご紹介^{しょうかい}すれば、私は草や虫や鳥を見るのが好きなのですが、キクイタダキという、それはもう愛らしい小鳥がいます。めったにお目にはかかれませんが、れども、この鳥、頭にちよこんと菊^{きく}の花を乗せたような模様があります。キクイタダキ、すなわち「菊戴^{いただ}き」です。

で、そんな「頭上にささげ持つ」というところから転じて、何かを頂戴^{ちやうだい}する、拝領する、という語義が生じました。ですから、「いただく」ものは何も食べものに限りません。菊の花でも霜^{しも}でも勲章^{くんしょう}でも、あるいはお小言^{せうごん}でも、いいはずです。しかし、どういうわけか、先述のような誤用^⑦（今のところはまだ誤用と言いたい）を見かけるのは、料理番組やレストランなどの、食べる行為にかかわる場面がほとんどなのです。たとえば何かの説明会やイベントで、司会者の発言や貼り紙などに「資料がご入用の方は一部五百円でいただけます」だの、「参加賞はお帰りの際にいただいでください」だのとあってもよさそうなもののに、ふしぎなことにそうした飲食に関係のない場面では、あやしい「いただく」を見聞きした覚えがありません。

なぜ飲食の場面に限って、謙譲語だったはずの「いただく」が、単なる丁寧表現として使われてしまうのか。保育園、幼稚園^{ようちえん}のときから、食事のたびにきちんと「いただきます」と手を合わせてきた国民にとっては、食べ物はどこか高いところからくだされるありがたいもの、という意識が染み^しみついているのかもしれませんが。だから自分が食べるときはもとより、客の行為にも、つつしんで「いただく」という動詞を使うのである。——なんていう説明で済めば、話はきれいですね。お百姓^{ひゃくしやう}さんや漁師さん、料理してくれたコックさん、はたまた頭ごとかじられる運命を受け入れてくれたエビさん、それらすべてに対する「e」のゆえなのである、と。

（清水由美^{しみず ゆみ}『すばらしき日本語』による）

問1 —線①「【】も湧かないし【】も躍らない」とあるが、これは「【】湧き【】躍る」という慣用句が元になっている。
その慣用句を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 泉湧き人躍る ロ 興湧き心躍る ハ 血湧き肉躍る ニ 湯湧き胸躍る

問2 1 4 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい（同じ記号は二度使えない）。

イ さらに ロ すると ハ それとも ニ たといえば ホ つまり

問3 —線②「某球団の監督さんが、応援歌の中で選手を『お前』と呼ぶのは、いささか礼を失するのではないか、やめてほしい、と苦言を呈した」について、次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1) 「苦言を呈する」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 耳の痛い忠告をする ロ 頭が下がる発言をする ハ 苦々しげに悪口を言う ニ 心苦しそうに頼み事をする

(2) 「監督さん」が「苦言を呈した」理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 目下の者に対して使う「お前」という言葉で選手を呼ぶことは、選手に対して失礼にあたると考えたから。

ロ 本来は敬う気持ちの強い「お前」という言葉で選手を呼ぶと、ばかにした呼び方になり失礼だと考えたから。

ハ 敬語として不適切な「お前」という言葉を使うことは、相手チームの選手を見下す失礼な行為だと考えたから。

ニ 親しい仲で使われる「お前」という言葉を選手に使うと、選手との適切な距離感が失われて失礼だと考えたから。

問4 — 線③「敬意がすり減って」とあるが、「敬意がすり減つ」た具体例としてどのようなことが文章中に挙げられているか。ゼラ

ニウム、お水をあげる、上位者、下位者の四つの言葉を必ず用いて、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問5 【 a 】に当てはまる二字の言葉を、考えて答えなさい。

問6 — 線④「敬意逡減の法則」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 謙讓語で適切に敬意を表す人の割合が減っていくこと。

ロ 敬語が失った分の敬意を前後の言葉で補おうとすること。

ハ 時間の経過とともに敬語で表せる敬意が減少していくこと。

ニ 相手への敬意が減っているのに丁寧な敬語を使おうとすること。

問7 — b — に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 供する ロ ごちそうされる ハ 賞味させる ニ 食べさせてあげる

問8 — 線⑤「奥歯に何かはさまったような言い方」が表現している様子として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 敵意を隠^{かく}して表に出さない様子。 ロ 軽薄^{けいはく}な表現で他人を不快にさせる様子。

ハ 言葉足らずで納得^{なつとく}できない様子。 ニ 思うことを率直^{そつちよく}には言いきらない様子。

問9 【 c 】に当てはまる表現を、十字以内で考えて答えなさい。

問10 【 d 】に当てはまる一語を、これより後の文章中からぬき出して答えなさい。

問11 —線⑥「お小言」の「小」と同じ読みをするものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 小₁一時間考え事をする。 ロ 小₂康状態に落ち着く。 ハ 小₃心者ほど声が大きい。 ニ 小₄川には魚がおよぐ。

問12 —線⑦「今のところはまだ誤用と言いたい」とあるが、そこに込められている筆者の考えとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 現在は誤用として認識されている使い方を、次世代の人たちはもっと良い使い方に変えてほしい。
ロ 現在は残念ながら誤用が広がってきており、近い将来は誤用の方が一般的いっばんてきになってしまうだろう。
ハ 誤用がだんだんと広まっていく現状をなげく人もいるが、その変化を前向きに受け入れていこう。
ニ 誤あやまった表現が多く使用されているが、それを認めることは不適切なので絶対に認めてはいけない。

問13 ー線⑧「参加賞はお帰りの際にいただいでください」とあるが、「いただいでください」が適当な敬語となるよう、次の

「」に当てはまる表現を、五字以内で考えて答えなさい。

・参加賞はお帰りの際に「」ください。

問14 「e」に当てはまる漢字二字の言葉を、文章中からぬき出して答えなさい。

三

次のA・B二つの文章を読んで、後の1～10の問いに答えなさい。(問題の都合上、本文を変えているところがあります。)

A

季語は、俳句に季節感をもたらす機能を持っている語だと言われます。それはそうかもしれませんが。しかし、季語自体は一つの言葉です。だから、一つのイメージを持った言葉としても読む必要があります。

たとえば、「風花」^{かざはな}です。「イ」風花は晴天に風に乗ってどこからともなく吹^ふかれてくる雪ですが、「花」という言葉に注目する必要があります。「ロ」そのため、雪に、散る桜の花のイメージを重ねて読むことで美しい光景が現れ、「風花」という季語の読みは完成するのです。「ハ」このように読まなければ、単に風に乗って来たちらつく雪のままです。「ニ」次のような句があります。

①

風花や衣山町^{きぬやままち}は坂の町

森川大和^{もりかわやまと}

今、風花が、都の衣笠山^{きぬがさやま}を思わせる衣山(きぬやま)という美しい名の町を、包^{つつ}み込んで舞^まっています。「ホ」舞い散る桜をおぼろにイメージさせつつ風花の舞う衣山の町は、一句においては

②

坂の町なのです。

「風花」と似たポピュラーな季語に、「麦の秋」^{ばくしゅう}「麦秋」^{ばくしゅう}があります。「風花」は、「風の花(春)」なのに「雪(冬)」であるというように季節がずれています。夏の季語「麦秋」「麦の秋」の場合は、季語を構成する言葉そのものがずれています。こうした内に季節のずれを持つ季語のことを「はすかいの季語」^③と呼ぶことにします。

(中略)

多くの歳時記^{さいじき}は、麦秋の「秋」は、実りの時ということであると述べていますが、この麦秋という言葉は、実りの時ということにとどまりません。「麦秋」という言葉通りに、秋それ自体のイメージを背後に持っているのです。爽やかな感じはそこから生まれます。歳時記などによる先入観^④にしばられて言葉を味わうのではなく、書かれている言葉そのものに即し^{そく}一句を味わうのです。そうすることによって、もつと自由に新鮮^{しんせん}に、深く一句を味わうことができます。

(中略)

一むらの竹の春ある山家かな

たかはまきよし
高浜虚子

「竹の春」も「春」とありますが、季節は春ではありません。秋です。落葉の季節に竹は枝葉ともども青々としていよいよ盛^{さか}んです。だから、「竹の秋」とはならず「竹の春」と言います。ここでも、言葉をはすかいに配置して楽しむ遊び心が見えて面白^{おもしろ}いです。

では、句の読みですが、この句は青々と茂^{しげ}った一むらの竹がある山里の長閑な風景であると同時に、^⑤それを重々承知の上で、「竹の春」の「春」を「春」そのものとして使っている句です。山里のわびしい家にもそれなりの幸福Ⅱ春があるのだと詠^よんでいるのです。^⑥嬉しいことに、この「竹の春」に対して「竹の秋」という季語もあります。

(二)
こゝにある離宮裏門竹の秋

高浜虚子

同じ高浜虚子（一八七四—一九五九）の句を例に挙げましたので、読者の方も一度レトリック的な読みを試みてください。一見秋のような世界ですが、実は春なのです。^⑦ そのずれの面白さがこの句の眼目です。

（武馬久仁裕『俳句の不思議、楽しさ、面白さ』による）

B

「竹の秋」という季語があります。秋の季語かと思いきや、実は、春の季語。春先になると竹の葉が黄ばんでくる。これが秋のようなので、竹の秋と言うのです。

文字だけで判断すると季節を間違えてしまいそうな季語が、日本語には意外にたくさんあります。有名などころでは、「小春日和（こはるびより）」。

⑧ 暖かく穏やかな晴天のことで、

⑨ の季語です。また、「秋の夜」は秋の季語ですが、「夜の秋」なら夏の

季語になります。暑いから、窓を開けっぱなしで寝ていたところ、夜中になって「おお寒」とあわてて窓を閉める。これが夜の秋です。

「斑雪（はだれゆき）」は、「はだら雪」「はだれ野」とか、単に「はだれ」と言うこともあります。これは、積もった雪が解け始め、地面の土色と雪の白色がまだらとなった状態のこと。そう、

⑩ なので ⑪ の季語です。

俳句をやると、こういう言葉に出会えるからたのしいんです。

（小倉一郎『小倉一郎のゆるりとたのしむ俳句入門』による）

問1 次の一文は、文章中の【イ】～【ホ】のどこに当てはまるか。最も適当なところを一つ選んで記号で答えなさい。

・「風花」は、その実態は雪ですが、花_ハ桜のイメージを背後に持っています。

問2 ー線①「風花や衣山町は坂の町」の「や」のような言葉を、俳句の用語では何と呼ぶか。三字以内で答えなさい。

問3

②

 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 田舎_{いなか}で人情深い ロ 桜咲く山深い ハ 春なお雪深い ニ 雅_{みやび}な情趣_{じょうしゆ}深い

問4 ー線③「はすかいの季語」とあるが、Bの文章で取り上げられている次の季語のうち、「はすかいの季語」ではないものを、一つ選んで記号で答えなさい。

イ 竹の秋 ロ 小春日和 ハ 秋の夜 ニ 夜の秋

問5 — 線④「先入観」の例として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 「風花」は冬の季語だから、春のおとずれを待ちわびる人々の思いを表現できる。

ロ 「麦秋」は夏の季語だから、麦をすくすく成長させる力強い生命力を感じさせる。

ハ 「竹の春」は春の季語だから、山里の春の生活を詠んだ句に使うのがふさわしい。

ニ 「夜の秋」は夏の季語だから、寝苦しい夜中の暑さを表現するのにはふさわしい。

問6 — 線⑤「それ」を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 竹が青々と茂っていること。 ロ 竹が春の季節を告げること。

ハ 山里が秋の風景であること。 ニ 山里の生活がわびしいこと。

問7 — 線⑥「嬉しいことに」とあるが、なぜ「嬉しい」と思ったのか。その理由を説明した次の文の【 】に当てはまる表現

を、Aの文章中から二十字以上二十五字以内でさがし、その初めと終わりの三字ずつをぬき出して答えなさい。

・筆者は「竹の秋」という季語にも、【 】と思ったから。

問8 ―線⑦「そのずれの面白さがこの句の眼目です」とあるが、Aの文章の筆者は、句の「眼目」(重要な点)である「面白さ」を

どのようなところと感じたと考えられるか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 季節は春なのに、離宮の裏門のあたりは秋のようなものさびしさが感じられるところ。

ロ 表門の秋のようなにぎわいにくらべ、裏門は春らしい静けさにつつまれているところ。

ハ 春の日に、裏門の竹やぶの中はすずしく、秋を思わせる心地よさが感じられるところ。

ニ 黄ばんだ竹は秋のような色だが、離宮の裏門には確かな春らしさが見て取れるところ。

問9

⑧

・

⑨

 に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ

⑧

 晩秋から初冬にかけての

⑨

 冬

ロ

⑧

 春のおとずれを待つところの

⑨

 冬

〃

ハ

⑧

 残暑がおさまったところの

⑨

 秋

ニ

⑧

 激しい台風が去ったあとの

⑨

 秋

〃

問10

⑩

・

⑪

 に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ

⑩

 風花

⑪

 春

ロ

⑩

 残雪

⑪

 冬

〃

ハ

⑩

 みぞれ

⑪

 冬

ニ

⑩

 雪解け

⑪

 春

〃
